

安部公房『燃えつきた地図』の世界

田鎖 数馬

一

安部公房『燃えつきた地図』（昭42・9、新潮社）は、失踪した根室洋の行方を追いかける、T興信所の「ぼく」の捜索活動に焦点を当てた、書き下ろしの長編小説である。あらずじを簡単に紹介すると次の通りである。——「ぼく」は、根室の妻である波瑠から、動機も分からないまま、突然に失踪した根室の行方を捜して欲しいと依頼された。そこで、根室とも親交のあった波瑠の弟や、根室とともに大燃商事に勤めていた田代に接触するものの、一向に根室の行方の手掛かりを掴むことができない。そのみならず、その過程で、波瑠の弟が殺されるという事件、田代が自殺するという出来事に遭遇することになる。さらに、田代の自殺直前の電話の相手が「ぼく」であったので、警察の追求を受けるだろうことを予想して、「ぼく」は、T興信所に辞表を提出せざるを得なくなってしまう。このよう

に、「ぼく」は、根室を見付けることができただけでなく、逆に、多くの人間を失い、自らの仕事さえ失っていく。その上、「ぼく」は、コーヒー店「つばき」で、何者かに暴行を受ける。これらのことが影響して、「ぼく」の精神は少しずつ変調を来すようになる。やがて、「ぼく」は、「左に大きくカーブして」いる、とある坂道を上り、その先に見える「台地の町」の風景を目にするのであるが、その風景に衝撃を受け、自分の存在を失ってしまう恐怖に取り憑かれるようになる。しかし、その恐怖に向き合いながら、「自分の世界」を取り戻すことを決意するところでこの作品は幕を閉じる。——様々な出来事が矢継ぎ早に起こる疾走感溢れる展開と、現代の都会人の孤独を伝える表現の力とが印象的な作品である。

ところで、田代が根室の情報素直に教えてくれないと感じた「ぼく」は、根室の捜索にもっと「自発的に協力」して欲しいと田代に不満を伝える場面がこの作品には存在

する。それに続けて、田代と「ぼく」とは、次のようなやりとりをしている。

「あんたとしちや、商売だから、そう言いたいだろうけど：でも、逃げた人間を、追いかけるばかりが能じやないでしょう：時には、かくまってやることの方が、必要かもしれないんだ。」／「しかし、自分の意志だつたとは限らないからな。殺されたのかもしれないし、暴力で、何処かに監禁されているのかもしれないし：」
／「子供だましみたいなのは、言わないで下さいよ。」

(論者注——この箇所を(Ⅰ)とする)

最初の話者が田代で、それに続けて、「ぼく」が反論し、田代が言い返すという流れである。このやりとりから見えてくることは、田代が、根室は「自分の意志」で、日常の場から「逃げた」と考えていたのに対して、「ぼく」が、根室は「自分の意志」に反して「殺され」たり、「何処かに監禁」されたりしている可能性もあると考えていた、ということである。

では、この「ぼく」と田代とでは、どちらが根室の失踪に関する妥当な見解を述べていたといえるだろうか。この問いについていえば、そもそも、田代は、根室の失踪の真相を実際に把握していたわけではないし、作中でもその真相は明らかにされることがなかった。となると、一般論からいって、人間の失踪の要因に関して、「殺され」たり、

「何処かに監禁」されたりしている可能性が全くと断定することはできないので、田代よりも、「ぼく」の見解の方が妥当であるというのが、自然に導かれてくる結論であるだろう。もっとも、この作品の時代には、人間が突然に「殺され」たり、「何処かに監禁」されたりして行方不明になることなど起こり得ないと設定されていたのであれば、「ぼく」の見解はやはり「子供だましみたいなもの」であつたことになる。そこで、右の問いに答えるためには、この作品の時代において、右のように行方不明になることが、どれほど現実的に起こり得ることと設定されていたのかということを知る必要がある。

そのことを知る上では、新潮社の初版本の215ページに、後掲の図一のような紙面が載せられていることを参考にすることができるといえる。というのも、この図一の紙面は、当時の人々の失踪をめぐる動向を示す材料としてこの作品に掲載されていると考えられるからだ。そこで、以下では、この図一の紙面に着目し、これを根拠にして、先述の如くに行方不明になることが、この作品の時代において、現実的に起こり得ることとして設定されていたことをまずは明らかにしたい。その後、このように設定されていたことからして、「ぼく」と田代とでは、「ぼく」の見解の方が妥当なものであつたことを指摘する。

こうした指摘を行うのは、作品後半部の読解に有効であ

ると考えるからである。具体的には、この指摘により、根室が「何処かに監禁」されている可能性もあるとする「ぼく」の言葉も妥当なものであったと分かるので、そのことを手掛かりにすれば、「監禁」の状態に置かれる「ぼく」の苦悩を描き出した作品後半の展開の意味を浮かび上げることができる。そこで、以下では、作品後半の読解に繋げるべく、まずは図一の紙面に着目する。

二

図一の紙面に着目すると、そこには、「蒸発人間」という見出しのもと、現在、「蒸発人間」が八万六千二百五十四人もいるという記事が最も大きく載せられている。「蒸発人間」とは、「家出人のなかで理由、動機がわからず、生死不明。生きているにしても、どんな暮しをしているのか不明な者」とその記事で説明されている。ここで、この紙面とこの作品本文との関係にも触れておく。先に引用した田代と「ぼく」とのやりとりの少し前に、田代が、「ほら、去年の新聞なんですけど、こんな記事が出ていましたよ」と「ぼく」に語りかけ、「破いた新聞の切れ端」を差し出す場面が存在する。それに続けて、田代は、その記事について、「行方不明の人間が、八万人以上もいるんですってね。驚いたなあ。根室課長のことも、べつに例外って

わけじゃなかったんだ」としみじみと述べている。図一の紙面は、この「破いた新聞の切れ端」に該当している。このように、この紙面は、失踪をめぐるこの作品の時代の動向を映し出した、作品本文とも深く関わるものであった。

さて、この図一の紙面の「蒸発人間」の記事をさらに詳しく読んでみると、「監禁」された人間についての言及はなかったものの、「殺人」などで「身元不明の死体」となった人間についての言及はあり、そうした人間も「蒸発人間」に含めていることが記されていた。となると、「去年の新聞」に、この「蒸発人間」の記事が大きく取り上げられていたのであるから、この作品の時代には、理由もよく分からぬまま、「殺され」て行方不明になっただろう人間も少なからずいたと設定されていたことが分かる。このことは、根室が「殺され」て行方不明になった可能性もこの時代において十分にあったことを意味している。それ故、「ぼく」の見解のうち、少なくとも根室は「殺され」た可能性もあるという部分については、やはり、妥当な見解であったと考えてよい。

では、根室が「何処かに監禁」されている可能性もあるという部分は、妥当であるのか。この問いに答えるために、同じ図一の紙面で、「蒸発人間」の記事の下に、丸で囲った通り、「内河」と「関係」という言葉を含む見出しとその記事とが存在することにも着目してみたい。図一では、

この見出しと記事は途中で破られた状態になっており、全てを読むことができないのであるが、ただ、「十四日の衆」・「連でスパイ容」・「た内河昌富事」・「秋氏（社）ら」などという言葉をそこに認めることができる。

これらの言葉のうち、特に「スパイ」・「内河昌富」という言葉に留意すれば、この記事は、内河昌富の「ソ連スパイ事件」に関わる問題を取り上げたものであると直ちに分かる。というのも、この内河の「ソ連スパイ事件」は、実は、昭和四十二年の新聞紙面を賑わす大事件であったからだ。『朝日新聞』の紙面の記事を検索できる、オンライン記事データベース「聞蔵Ⅱ」によって検索してみたところ、この内河の事件を取り上げた記事は相当数に上った。

まず、一番最初にこの事件を取り上げたのは、「聞蔵Ⅱ」によって検索した限りでは、六月二十三日夕刊の「邦人旅行者を軍事裁判 ソ連 スパイ容疑で抑留」である。この記事では、「ソ連、モンゴル」などを観光旅行していた「会社員」の「内河昌富」が、「昨年十月ソ連官憲につかまり、数カ月抑留されたうえ」、「軍法廷で裁判にかけられている」ことなどが記されている。続いて、六月二十四日朝刊の「自由はく奪八年 スパイ容疑の日本人」の記事では、軍事法廷で「自由はく奪八年（うち三年監獄で服役、五年間の矯正労働）の判決」が言い渡されたこと、「旅行者が裁判の結果、懲役に処されたのは、内河さんが初めてであ

る」ことなどが記されている。六月二十四日夕刊の「去年まで情報機関に ソ連でスパイ罪の内河さん」の記事では、ここで初めて、現在「会社員」である内河が、実は「去年」まで「世界政経調査会」の職員であったことなどが明らかにされている。「世界政経調査会」とは、後掲の「内河氏との関係否定」の記事によれば、「内閣調査室からの委嘱を受け、共産圏諸国などの政治経済事情の調査」を行う団体である。この他、六月二十五日朝刊「内河さん上告へ ソ連でもスパイ事件 刑期長すぎると」、六月二十六日朝刊「旅費は貯金から、ソ連スパイ事件 内河さんの妻語る」、六月二十七日朝刊「政府機関の委託で」スパイ事件 内河さん供述」、六月二十七日夕刊「内河事件 国会で追及」、六月二十八日夕刊「なれあいではないか 内河事件 衆院外務委でも質疑」、六月三十日夕刊「旅券法違反 つく 内河さんのスパイ事件 衆院法務委で質疑」、七月一日朝刊「内河さん、上告 ソ連スパイ事件」、七月十四日夕刊「内河氏との関係否定」、八月一日朝刊「情報マンの勇み足？ ソ連スパイ事件」の内河さん」、八月三日夕刊「情報費」公開せよ 内河事件 参院委で追及」、八月二十四日夕刊「刑期半減し四年 ソ連最高裁 内河さんに判決」、十一月一日朝刊「内河氏は恩赦もれ ソ連でスパイ容疑」などの記事が載せられている。このように、内河の「ソ連スパイ事件」は、昭和四十二年において、新聞

に取り上げられる機会が非常に多い事件であった。そして、『燃えつきた地図』は、その昭和四十二年の九月に刊行された。となれば、安部は、「内河」と「関係」の記事を含む紙面をわざわざその記事の途中で破く形で掲載しており、この記事のどの部分を残し、どの部分を外すのかということも含めて、それなりにこの記事に注意を払っていたはずであるので、この時の安部の念頭に、内河の「ソ連スパイ事件」がなかったとは到底考えられない。

ところで、この内河の「ソ連スパイ事件」では、内河は「ソ連でスパイ容疑」で拘束され、かつ、「監獄で服役」することになっていたのであるから、国家権力による強制的な行為によって、「自分の意志」に反して、一定の場所に閉じ込められてしまう状態に置かれること、つまり、ある種の「暴力」的な行為によって、「監禁」の状態に置かれることを余儀なくされていたといえる。ということは、この事件を取り上げた「内河」と「関係」の記事が作品に掲載されているのであるから、この作品の時代は、人間が「監禁」状態に置かれて日常の場から突然に姿を消すこともあり得た時代であった、ということになる。勿論、「内河」と「関係」の記事は、図一のように、紙面の片隅に途中で破られた状態で掲載されているので、読者が、この記事に目を向け、内河の「ソ連スパイ事件」をそこから思い起こすことがどれほどできるのかは定かではない。さらにいえ

ば、読者にそのように思い起こさせようとする意図が、そもそも、安部の中にどれほどあったのかも定かではない。しかし、仮に、読者がこの事件を思い起こすことが困難であったとしても、また、安部に右の意図がなかったとしても、内河の「ソ連スパイ事件」を窺わせる言葉を含む記事が紛れもなくこの作品に掲載されていることに変わりはないので、作品世界の理解として、この事件は、この作品の時代の動向を映し出すものであったと捉えることはできる。そのため、根室が「何処かに監禁」されている可能性もあるという部分についても、「ぼく」の見解は妥当なものであったと結論付けてよいのである。

ここで、話をやや遠回りさせることになるが、この結論をより確固としたものにするために、図一の「内河」と「関係」の記事が、内河の「ソ連スパイ事件」に関わる問題をとり上げたものであると本当にいえるのか、という点を念のため確認しておきたい。そのためには、図一の紙面において、「内河」と「関係」の記事は途中で破れていて、全てを読むことができないので、図一の紙面の元になった紙面を特定し、その紙面から、その記事の全体を読む必要がある。では、その元になった紙面は何であるのか。この点については、波瀾剛「安部公房『燃えつきた地図』論——作品内の読者、小説の読者、および同時代の読者をめぐって——」（平9・3『文学研究論集』）によって既に、「朝

日新聞」一九六七年七月一五日朝刊社会面」を「元にして
いる」と指摘されている。ただし、この波瀾論文では、「元
にし」た『朝日新聞』の紙面にこれ以上深く言及されるこ
とはなく、その紙面は、具体的にどの本社・支社から発行
されたものであるのかが検討されていない。そのためであ
るのか、図一の紙面は、その『朝日新聞』の紙面をどのよ
うに「元にして」いるのか、という点が明らかにされてい
ない。この点は、他の先行研究でも明らかにされていない。

もつとも、一般的にいつて、特段の断りもない場合には、
『朝日新聞』の記事として用いられるのは東京本社発行版
（論者注——以下、東京版と略記）であるだろう。波瀾論
文でも、東京版を「元にして」ると論じていたと推定さ
れる。そこで、ひとまずは、「聞蔵Ⅱ」によって、東京版
「朝日新聞」一九六七年七月一五日朝刊社会面」の該当
の紙面を探してみたところ、後掲の図二の通り、図一の紙
面と類似する紙面を見付けることができた。とはいえ、こ
の図二の紙面は、図一の紙面と完全に一致しているわけ
ではなく、「内河」と「関係」の記事はそこには存在しな
かった。⁽²⁾ 具体的にいえば、図一の方で「内河」と「関係」の
記事が載せられていた場所に、図二の方では、丸で困った
通り、「斎藤さん、スイス バビレで遭難死」の記事、あ
るいは、「シゴキ注意され乱暴」の記事が載せられている。
したがって、この図二の紙面からは、「内河」と「関係」

の記事の全体を読むという目的を達成することはできな
い。

ところで、『朝日新聞社史 資料編』（平7・1、朝日
新聞社）第2章の3「発行体制沿革図」によれば、『燃え
つきた地図』刊行当時の朝日新聞社には、東京本社、大阪
本社、西部本社、名古屋本社、北海道支社があった。山本
明・藤竹曉編『図説 日本のマス・コミュニケーション
第二版』（昭62・6、日本放送協会）Iの2「新聞の種類」
において、全国紙は「ブロックごと本社ないし発行所が
あつて、ある程度の独立性をもった編集を行つて」いたと
指摘されている通り、朝日新聞社のこれらの本社・支社に
おいても、記事の選択の方法や文章表現や紙面の構成など
が、それぞれで異なっている。そのため、図一の紙面は、
『朝日新聞』の東京本社とは別の本社・支社から発行され
た紙面を掲載したものであつた可能性が考えられるように
なる。

そこで、国立国会図書館所蔵の『朝日新聞』を調査して、
右のそれぞれの本社・支社発行の該当の紙面を確かめてみ
ると、後掲の図三で示す通り、図一の紙面と全く同じ紙面
が、北海道支社発行版『朝日新聞』（論者注——以下、北
海道版と略記）の昭和四十二年七月十五日の朝刊に存在し
た。これを見れば、図一と図三の紙面は同一のものである
と分かる。そのことを念のため確かめるために、図一の「内

「河」と「関係」の記事に目を向けてみると、先述の通り、そこに、「十四日の衆」・「連でスパイ容」・「た内河昌富事」・「秋氏（社）ら」などという言葉を見出すことができる。これらの言葉は、全て図三の「内河氏との関係否定」の記事に存在している。となると、図一の紙面は、図三の北海道版の紙面を載せたものであったと予測し得る。実際、国立国会図書館所蔵の『朝日新聞』では、大阪本社・西部本社・名古屋本社発行版の該当の紙面は、いずれも、図一や図三の紙面と大きく異なっていた。参考までに、大阪本社発行版を後掲の図四で挙げておく。これらのことから、図一の紙面は、東京本社・大阪本社・西部本社・名古屋本社発行版の紙面ではなく、図三の北海道版の紙面を載せたものであった可能性が最も高いと考えられる。

とはいえ、そのように確実に断定できるわけではないことも事実である。というのも、同じ本社・支社から発行された同じ日の朝刊であったとしても、印刷の時間帯によって、つまり、版の違いによつて（論者注——一般に印刷時間の早い順に、「第一版」「第二版」→「最終版」という言い方をする。こうした時間を意味する版の違いによつて）、紙面構成が異なることもあり得るからだ。そのため、国立国会図書館所蔵の東京本社・大阪本社・西部本社・名古屋本社発行版の紙面の版とは異なる版の、東京本社・大阪本社・西部本社・名古屋本社発行版の紙面を探せば、図

三の北海道版の紙面と同じものが出てくるのかも知れない。もつとも、国立国会図書館所蔵の大阪本社・西部本社・名古屋本社発行版の紙面を見る限り、図三の北海道版の紙面とは相当に異なっているもので、これらの異なる版において、図三の北海道版と同じ紙面が存在していたとは考えにくい。むしろ、国立国会図書館所蔵の東京版と図三の北海道版の紙面が近似している^④ので、その国立国会図書館所蔵の東京版の紙面とは異なる版の東京版の紙面の中に、図三の北海道版の紙面と同じものがあつたという可能性はあるだろう。現在の論者は、「聞蔵Ⅱ」に掲載されており、かつ、国立国会図書館が所蔵している、図二の東京版第十二版（論者注——この第十二版が最終版である）しか目にする^⑤ことができていないので、その可能性を否定することはできないのである。そのため、国立国会図書館所蔵の『朝日新聞』を調査した結果、図一の紙面と同じものは図三の北海道版のみであり、管見の限りでは、図一の紙面はこの北海道版を掲載していた可能性が最も高いと、断定を避ける形でここでは指摘するに留めておかざるを得ない。

ただし、本稿では、北海道版をそのまま掲載していたことを明らかにすることが不可欠であつたわけではない。むしろ、図一と同一の実在の紙面を探し出し、その紙面から、「内河」と「関係」の記事の全体を読み、そこで内河の「ソ連スパイ事件」に関わる問題が取り上げられているという

ことを確認することが当面の課題であつた。そこで、図三の「内河氏との関係否定」によつてこの記事の全文を読むことができるので、これにより、その内容を紹介しておく。^(註)

「内河氏との関係否定」の内容は以下の通りである。

——十四日の衆院法務委員会で、社会党の「横山利秋」が、内河が「ソ連でスパイ容疑」で拘束され、有罪判決を受けたことを取り上げ、「世界政経調査会」と内河との関係を追及したと記されている。具体的には、横山が「世界政経調査会前会長」の「広岡譲二」を参考人として呼んで、「ソ連でスパイ容疑」で拘束されるに至つた内河の行為と「世界政経調査会」との関係を質問したのである。しかし、見出しにある通り、広岡は、その関係を否定している。——ここから、この「内河氏との関係否定」の記事では、内河の「ソ連スパイ事件」に関わる問題が取り上げられていたことを確認することができる。そのため、先述の「結論」はより確固としたものとなるだろう。この作品の時代は、人間が「監禁」状態に置かれて日常の場から突然に姿を消すこともあり得た時代であり、根室が「何処かに監禁」されてゐる可能性もあるという「ぼく」の言葉も、時代の動向と合致した、妥当なものであつたとやはり理解することができるのである。^(註)

では、「ぼく」が妥当な見解を述べていたとすると、それは何故であるのか。それは、第一に、「ぼく」が、興信所の調査員として、つまり、「商売」として、根室を見付ける必要がある、そのためには、あらゆる可能性を考慮する必要があることを知っていたからであるだろう。それに加えて、第二に、「ぼく」がそのように考慮するができた大前提として、この時の「ぼく」が妥当な見解を述べることのできる精神的な余裕を持っていたからでもあるだろう。この第二のことを理解するためには、田代の見解を取り上げ、それとの比較から、「ぼく」の見解の意味を考えなければならない。そこで、田代が、「ぼく」とは対照的に、根室は「自分の意志」で「逃げた」と決めつけていたのは何故であるのかという点をまずは考えてみたい。この点については、例えば、田代が、自分は、根室と同じように、大燃商事で働く毎日から「逃げ」ることができると自らに問いかけた後、次のように自答していることを手掛かりにして、その答えを導いてくることができる。

「ぼくには、出来ないな……あんな、くだらん会社……自分が、あんな会社のために、貴重な人生を切り売りしているんだと思うと、火でも付けてやりたいくらいだ
けどさ……でも、どこに行つたつて、どうせ似たりよっ

たりでしょう(以下略)」

田代は、「どこに行つたつて、どうせ似たりよつたり」と諦めて、何とか現在の生活を維持しようと考えていたのがあるが、それでも、その生活に何の価値も見出せないという虚無感、「逃げ」るに値する場所があるのなら、本当は「逃げ」たいという願望を、心の中に潜ませていたといえるだろう。田代が後に自殺することも踏まえれば、この虚無感は相当に深刻なものがあつたと考えてよい。こうした田代であつたから、根室が日々の生活から「逃げ」たいと思ふのは当然のことであり、実際に「自分の意志」で「逃げ」たことは確實であると決めつけずにはおれなかつた。

この田代と比較するならば、この時の「ぼく」の中には、田代のような虚無感や願望は存在しなかつた、あるいは、心の中にそのような虚無感や願望が存在していたとしても、「ぼく」はそのことに十分に自覚的ではなかつた、ということが分かる。そうであるからこそ、田代が、自分自身の虚無感や願望を根室に当て嵌めて、根室は「自分の意志」で「逃げ」たのだと主観的に決めつけていたのとは対照的に、「ぼく」は、冷静に、先述の妥当な見解を述べることができるのである。

このことは、「ぼく」が、日々の生活から「逃げ」た人間の思いを、自らの問題として未だに深刻に受け止めていたわけではなかつた、ということを意味している。「逃げ」

た人間への対応に関する、田代と「ぼく」との次のような見解の相違は、そのことをよく示している。最初の話者が田代で、それに「ぼく」が答え、さらに、田代が反論するという流れである。

「資格の問題ですよ。ぼくらは勝手に、人間には居場所が決つていて、逃げた人間には、首に鎖をつけてでも連れ戻すべきだと、決めてかかつているけど……そんな常識に、どこまで根拠があるのかつてことですね……本人の意志にさからつてまで、他人の居場所に干渉する権利が、誰にあるのか……」／「もとの居場所から逃げ出したところで、どうせまた、べつの居場所に落着くだけのことだろう。大した意志でもないんじゃないのかい。それより、もとの居場所に対する、義務と責任も考えてもらわなけりやね。」／「その義務を放棄したことだつて、ちゃんと意志に含まれているのかもしれない……」(論者注——この箇所を(Ⅱ)とする)

田代は、先述のような虚無感や願望を心の中に抱えていたからこそ、「逃げ」た人間の「意志」を尊重し、「逃げ」た人間を無理に「連れ戻す」ことに批判的であつた。それに対して、「ぼく」は、「逃げ」た人間の「意志」を重視することなく、「逃げ」た人間を「連れ戻す」ことを必要と考へていた。

同様のことは、富山と「ぼく」の次のやりとりからも窺

うことができる。すなわち、富山が、「べつに、罪を犯したってわけじゃないんでしょ……自分の意志で逃げ出した人間を、当然のことみたいに、つかまえる権利があると思ひ込んでいるつてのが、私には腑に落ちないんだ」と述べたのに対して、「ぼく」は、「逃げられた側からすれば、同じ理屈で、逃げる権利もないと主張したいわけです」と言い返す（論者注——この箇所を（Ⅲ）とする）やりとりである。ここで、富山について説明すると、富山とは、「つまらないことで前の会社を飛び出し」た後、次の仕事として、個人でタクシーの「営業所」に向いて、門の前で臨時に採用してもらおう、「門前や臨時」と呼ばれるもぐりのタクシー運転手を選んだ人物である。富山は「前の会社を飛び出し」たのであるから、その「会社」での生活に不満を持つていたと考えてよい。つまり、田代と同じような先述の虚無感や願望に囚われる経験をしていた。こうした富山であるからこそ、日々の生活から「逃げ出した」人間に同情的であり、「逃げ出した」人間を追い回す権利は世間の人間にはないと主張する。それに対して、「ぼく」は、「逃げられた」人間の側に立って、「逃げ出した人間」を連れ戻そうとする姿勢をやはり崩すことはなかった。

これらのことから、この時の「ぼく」は、富山や田代と比べて、日常の場から「逃げ」た人間の思いを自らの問題として深刻に受け止めていたわけではなかったといえる。

言い換えれば、「逃げ」た人間の状況を、あくまでも調査員の目で、距離を置いて眺めていた。そうであるからこそ、根室は「殺され」たり、「何処かに監禁」されたりしている可能性もあるとする、妥当な見解を述べることでできたのである。

ここで、根室は「何処かに監禁」されている可能性もあるとする「ぼく」の見解に焦点を当てる。これもまた、距離を置いて現状を眺めるが故に発することのできた妥当な見解である。ただし、このように焦点を当てることを疑問視する向きもあるのかも知れない。というのも、「ぼく」は、これまで根室失踪の要因を様々に考えてきており、その流れの中で、（Ⅰ）の場面で、「監禁」の例を持ち出したに過ぎないのであつて、その例を持ち出したことは、「ぼく」の意識からすれば、さして大きな意味はなかったとも考えられるからだ。さらにいえば、作品全体から見ても、（Ⅰ）はささやかな一場面であるに過ぎないので、安部がここで「監禁」という言葉を使用したこともまた、深い意図はあるいはなかったのかも知れない。しかしながら、「ぼく」の意識がどうであるにせよ、また、安部に深い意図が仮になかったとしても、「ぼく」が「監禁」について先述の如くに語っていた（Ⅰ）の場面は、「監禁」の状態に置かれる「ぼく」の苦悩を描き出した作品後半の展開——「左に大きくカーブして」いる坂道を上っていた「ぼ

く」が、少しずつ、自分の存在の意味を見失っていくところを描き出した、この作品の山場というべき一連の場面——と結果として明確な対照性を形作っていることは少なくとも確かである。そして、この対照性に注意することは、作品後半の読解を行う上で有効である。そこで、続いて、その対照性を具体的に明らかにし、それを、作品後半の読解に繋げていきたい。

四

先述の通り、「ぼく」の精神は、根室を搜索する過程で、少しずつ変調を来すようになっていた。その中で、「ぼく」は、「つばき」の近辺にある、先述の「左に大きくカーブして」いる坂道を上っていくのであるが、その時の「ぼく」は、「台地の町」がもう少しで見えてくることを予想している。しかし、坂道を上っていけば見えてくるはずのその「台地の町」の「風景」を、「なぜかどうしても思い出すことが出来」ずに、焦りを感じるようになる。そして、「万一、のぞいた風景が、やはり見知らぬ土地だったりしたら、どうやって收拾をしなければいいのだろう、すっかり知りつくしているつもりなの、この坂の途中の光景だって、たちまち未知の世界へと、道づれにされてしまわないとも限らないのだ」と不安を募らせるようになる。

このように、「ぼく」は、坂道を上ればやがて見えてくるその「風景」を「思い出すことが出来」ない。それは、「ぼく」が精神に変調を来すようになっていたからである。ただし、それだけではなく、別の理由も存在する。その理由として、この坂道がある一帯の地域は、実際には、「ぼく」が日常生活を送る場所ではなかったこと、むしろ、ここは、失踪前の根室が生活していた、そして、現在も波瑠が生活している場所であったことを挙げることができる。つまり、「ぼく」にとつて、その「風景」を含む一帯の地域は馴染みの場所ではなかったため、その「風景」を「思い出すことが出来」なくとも不自然ではないのである。もつとも、そうであるにもかかわらず、「ぼく」は、ここを自らの馴染みの場所と考え、これから「自分の家に帰ろうとしている」とまで思い込んでいた。ということは、精神に変調を来していた「ぼく」が、執拗に根室を追いかけるうちに、いつしか、根室についての知識や情報の一部を、自分自身についての知識や情報と思い込むようになっていた、ということの意味している。そのために、「ぼく」は、ここを自らの馴染みの場所と思うようになり、馴染みの場所であるにもかかわらず、「よく見知っているはず」の「風景」を「思い出すことが出来」ないと焦りを強めていくのである。

この焦りは、やがて、自分の存在を疑う気持ちをもたら

していく。そのため、「ぼく」は、「たまらない寂寥感におそわれ」る。そこで、「カーブの向うにあるはずの風景」を見ることを一旦は断念し、坂道の途中で引き返す。しかし、その後、「つばき」を見付けて入るものの、自分の名前や職業すら思い出すことができないまま、ますます自分が何者であるのかが分からなくなる。恐怖を強める「ぼく」は、「つばき」を出て、タクシーを呼び止めた。タクシーで坂道を上り、今度こそ、「カーブの向うにあるはずの風景」の正体を見届けようと考えたのである。

そこで、「ぼく」は、その「風景」を目にしたのであるが、その時、次のような恐怖に支配される。

四階建の住宅群が、高台のくせに、暗い谷底に沈み、規則正しい光の格子をくりひろげている。まさか、こんな風景が現れようとは、想像もしていなかった。だが、その想像もしていなかったところが、問題なのだ。町は、空間的には、まぎれもなく存在していたが、時間的には、なんら真空と変わらない。存在しているのに、存在していないというのは、なんとという恐ろしいことだろう。(中略) ぼくの町は消えてしまったのだ。(中略) うかがうように、徐行しはじめた運転手に、ぼくはどなりつけんばかりにして、命じていた。早く引返してくれ！ともかく、一刻も早く、この団地を出ることだ！せめて、空間の自由が保証されている場所に、

逃げ出さなければいけない。こんなところに、かかわりあいになっていたりしたら、時間はおろか、いずれ空間までも失って、それこそあの白い手の主人同様、現実の壁の中に塗り込められてしまうにちがいない。

まず、ここでいう「白い手の主人」について説明すると、その「主人」とは、ついさきほど「ぼく」が入った「つばき」の「主人」のことである。この「主人」は、「カウンターの後ろ」に常について、その「鳩舎の口のような小窓」から「注文の品」を差し出していた。「ぼく」は、この「主人」の「顔」を見ることができず、ただ、「注文の品」を「差出す」その「主人」の「白く、ぶよぶよ」とした「手」しか見ることができなかった。その時、「ぼく」は、この「主人」を、「つばき」の「止り木」の上で「膝を組み合わせている」店員の女の「夫か、それに類するもの」であると推測した。その上で、その「主人」は、「妻の肢体を這いずりまわる、客の視線を想像しながら」、「嫉妬のあまり、ああして壁の向うに自分を閉じ込めてしまった」男であると考えたのである。さて、そのことを確かめた上で、右の引用箇所に戻ると、「坂の上」から見た町は「時間的には」「存在しているのに、存在していない」とする、「ぼく」の感覚を伝えた言葉がやや分かりにくいので、説明の必要があるだろう。この言葉を理解するにあたっては、「ぼく」が、「こんな風景が現れようとは、想像もしてい

なかつた」ことこそが大きな「問題」であると、その直前で考えていたことに留意しなければならぬ。そのことに留意すれば、「想像」の及ばない「こんな風景」が意外にも「現れ」たということが、右の「ぼく」の感覚をもたらしていたと読むことができる。具体的にいえば、この町は、本来ならば「ぼく」が長年に渡って日常生活を過ごしてきた馴染みの場所であるはずなのに、いざその町の「風景」を目にすると、「想像」に反して、「ぼく」には、「ぼく」が過ごしてきた「時間」の積み重ねをそこから感じることはできなかった。そのために、「ぼくの町は消えてしまった」という思いを抱くことになる。この思いは、換言すれば、「ぼく」がこの町で過ごしてきた「時間」は失われたという思いであり、そこから、眼前のこの町には「時間」の流れが「存在していない」という思いもまた生まれてくるだろう。その思いを、この町は「時間的には」「存在しているのに、存在していない」という言葉で表現していたと理解することができる。このような思いに囚われるようになった結果、この町に深く関われば、「時間」の停止した状態、それ故に、動くこともできない状態になり、「空間の自由」も「保証され」なくなってしまうと考えるようになる。こうして、「時間はおろか、いずれ空間までも失つて」、「白い手の主人」と同じように、「現実の壁の中に塗り込めら」れてしまうと、恐怖を覚えるようになる。

とはいえ、この引用箇所では、「空間の自由が保証されている場所に、逃げ出さなければいけない」と記されている。そのため、この時の「ぼく」は、この「団地を出」れば、そのような「場所」に辿り着くことができるかと期待していたようにも見える。しかし、実際には、その期待も虚しいものであることを、やがて痛感するようになる。そのことは、「団地」の「風景」を見た後、坂道を下つて、公衆電話ボックスに至った「ぼく」が、次のような新たな「自覚」をするようになったことから知ることができる。

誰だつて、今のぼくと同じように、狭い既知の世界に閉じ込められていることに変わりはないのだ。坂のカーブの手前、地下鉄の駅、コーヒー店、その三角形はなるほど狭い。狭すぎる。しかし、この三角形が、あと十倍にひろがったところで、それがどうしたというのだ。三角形が、十角形になったところで、何処がどう違ふというのだ。／＼もし、その十角形が、決して開かれた無限に通じる地図ではないことを、自覚したとしたら：救助を求める電話に応じて、やって来る、救いの主が、自分の地図を省略だらけの略図にすぎないと自覚させる、地図の外からの使いだったとしたら：その人間もまた、存在しながら存在しない、あのカーブの向うを覗き込んでしまったことになるのだ。電話のコードは、首吊りの輪にもなる。(論者注——この箇

所を(IV)とする)

ここで、まず、「救助を求める電話にに応じて、やって来る、救いの主」という描写について説明すると、もともと、「ぼく」は、手元に電話番号が書かれたノートの切れ端を持っていたのであるが、記憶を失っていたので、それが、どこに繋がる電話番号であるかが分からなかった。しかし、「団地」の「風景」を見てから、ますます、外側の現実との繋がりを欲するようになっていた「ぼく」は、公衆電話から、その番号に電話をかけることにした。ところで、この電話番号は、実際には、「つばき」の番号であり、そこで働く「止り木」に在る店員の女が、「ぼく」からの電話を受け取った。その時の「ぼく」は、その電話の相手が「止り木」の女であるとは分からなかったのであるが、ただ、その電話の相手に「助けてほしいんだ」と訴える。そこで、「止り木」の女は、その訴えに応じて、「ぼく」のいる公衆電話ボックスにこれから向かうことを約束する。このように、電話を受け取り、これから助けに来てくれる相手のことを、「ぼく」は「救助を求める電話に応じて、やって来る、救いの主」と述べていたのである。さて、そのことを確かめた上で、右の引用箇所もまたやや分かりにくいので、この箇所を解釈してみると、「ぼく」は、「誰だって」「狭い既知の世界に閉じ込められている」という考えを持つようになっていいる。その上で、仮に、その「既知の世界」が、「無

限に通じる」ことのない、閉ざされた「世界」であると「自覚」したとしたら、言い換えれば、人間は「既知の世界に閉じ込められ」ており、そこから逃れようがないことを「自覚」したとしたら、かつ、その「既知の世界」が「省略だらけの略図」であり、「既知」であると思っていた「世界」を、実際には殆ど何も知ってはいなかったと「自覚」したとしたら、誰しも、「ぼく」が「カーブの向うを覗き込んだ」時のように、「現実の壁の中に塗り込めら」れてしまいかねないということ、別の箇所の表現を借りれば、「壁の向うに自分を閉じ込めてしま」いかねないということが記されていた。このように、人間は、何らかのきっかけで容易に未知の世界へと変貌を遂げていく、危うい「既知の世界」に閉じ込められていると考えるようになったので、仮に、先述の「団地」から「逃げ出」したとしても、その「団地」とは別の場所で、「壁の向うに自分を閉じ込めてしま」う状態にならないとは限らないと、恐怖するようになっていた。「ぼく」は、精神に変調を来していたので、平凡に日常生活を過ごしているだけでは意識されにくい、しかし、誰しもが囚われる可能性のあるこうした不安——当たり前存在すると思っていた「既知の世界」に疑問を抱き、それがいつしか未知の世界として見えるようになり、自分の存在の意味が失われていくという恐怖——に直面することになった。

ところで、先述してきた、「壁の向うに自分を閉じ込めてしま」うという表現、「空間の自由が保証され」ていない場所に取り残されてしまうという表現、あるいは、「既知の世界に閉じ込められている」という表現には、「監禁」の意味合いがある。そのため、「団地」の「風景」を目にしてからの「ぼく」は、その「団地」や、それに限定されない、あらゆる日常の場から、「監禁」のイメージを呼び起こし、自分の存在が封じ込められ、消されてしまう恐怖を感じるようになっていたといえる。あらゆる日常の場は、そもそも「既知の世界」の中に閉ざされた「監禁」状態に近い場所であり、しかも、その中で、「既知」であると思っていた世界が未知の世界に変貌していくことを目の当たりにした時、さらに「壁の向うに自分を閉じ込めてしま」う「監禁」状態に置かれることになりかねないと感じるようになっていた。

となると、嘗ての「ぼく」は、根室が「何処かに監禁」されている可能性もあるという、妥当な見解を述べることができている状態にあり、それ故に、根室の居場所を突き止める、可能であれば、連れ戻すべきであると考えることができたのに対して、ここでの「ぼく」は、他ならぬ日常の場こそが実は「監禁」の場所なのであって、そこに留まれば自分の存在を失うことになりかねないと、内側からの恐怖の声を発せずにはおれない状態になっており、それ故に、根室

を連れ戻すどころか、自分こそが逃げ出さなければならぬと考えるようになっていた、ということが分かる。ここに、「ぼく」の劇的な変貌を見て取ることが出来る。嘗ての「ぼく」には、「逃げ」た人間の状況を、あくまでも調査員の目で距離を置いて眺める精神的な余裕があり、そのため、「監禁」状態に置かれることもまた、他人事としか感じていなかったのであるが、ここに来て初めて、その状況を自らの問題として受け止め、「監禁」状態に置かれる恐怖を痛切に感じるようになる。「ぼく」の劇的な変貌は、「監禁」状態に置かれることに関するこうした「ぼく」の感じ方の変化に対応していた。したがって、根室が「何処かに監禁」されている可能性もあるという先述の「ぼく」の言葉は、「ぼく」の変貌の意味を鮮やかに浮かび上がらせる働きを、この作品の中でしていたということになる。

五

以上のように論じてみると、この作品では、「監禁」のイメージが重要な意味を持っていたことが分かる。実際、そのことは、先述の(IV)の箇所以降の展開からも読み取ることが出来る。先述の通り、「ぼく」は、他ならぬ日常の場こそ「監禁」の場所であるという絶望的な認識に至ったのであるが、そこから、新たに「自分の世界」を獲得し

なければならぬと決意するようになる。その際にも、「監禁」のイメージが利用されているのである。

そのことを確かめるため、先述の電話番号に電話して、「救いの主」に「救助を求め」たにもかかわらず、その「救いの主」が来るのを待たずして、「ぼく」が、公衆電話ボックスから出て、咄嗟に「反対側の歩道に向つて、一気に駆け渡り、その後に来た「救いの主」から身を隠し続けた」という場面の意味を考察する。そこで、「ぼく」が、「救いの主」から身を隠しながら、次のように決意するところをまずは取り上げる。

探し出されたところで、なんの解決にもなりはしないのだ。今ぼくに必要なのは、自分で選んだ世界。自分の意志で選んだ、自分の世界でなければならぬのだ。彼女は探し求める。ぼくは身をひそめつつける。(中略)過去への通路を探すのは、もうよそう。手書きのメモをたよりに、電話をかけたたりするのは、もう沢山だ。

これまでの「ぼく」は、「過去への通路を探す」ことに必死になつていた。つまり、過去から現在に至る「時間」の積み重ねの中で得られた知識や情報に基づき、「既知」の事実を踏まえて、現在の現実世界を理解しようとしていたし、また、理解したつもりになつていた。それは、「ぼく」が、担当する事件についての知識や情報を重視する調査員

の仕事をしていたことも関係しているだろう。そのために、その既存の知識や情報にいつしか囚われてしまい、「自分の意志」で「自分の世界」を獲得することを疎かにしていた。先の(Ⅰ)と(Ⅱ)と(Ⅲ)の引用箇所は、(十)の傍線部を見れば、嘗ての「ぼく」が、田代や富山とは対照的に、「逃げた人間」の「自分の意志」を軽視していたことが分かるのであるが、このように軽視していたことは、右のように疎かにしてきたことと関わっているだろう。その「ぼく」が、ここに来て、「自分の意志」で「自分の世界」を獲得する決意を固めていく。

「ぼく」の中でこうした決意が生まれた理由については、作中で説明されていない。ただ、説明されていないことは、「ぼく」の決意が、言葉では説明し難い、心の奥底から突如として迸り出た激しい感情に由来するものであったことをかえって示しているだろう。もともと、前掲の引用箇所(Ⅳ)で「電話のコードは、首吊りの輪にもなる」と記されていた。「ぼく」は、右の決意を固める直前において、自殺することすら意識し始めていたといえる。となれば、こうした「ぼく」の絶望的な意識が、その絶望的な状況からの脱却を切実に要求する、右の激しい感情を呼び起こしたと解釈することができる。現実生きる道を模索する決意は、それにより生まれてきたのである。その際、「ぼく」の最初の行為が、ドアが「強力に閉り、しかし閉りきる直

前で、パネの力が吸収されて、三センチばかりの隙間を残す」状態になっていた公衆電話ボックスから出るという行為であったことには留意する必要がある。つまり、閉じ込められかねない、「監禁」に近い状態になっていた公衆電話ボックスから脱出することと、「壁の向うに自分を閉じ込めてしま」う「監禁」状態から脱して、「自分の世界」を獲得しようとする決意することとが密接な関係にある、と読むことのできる設定になっていた。公衆電話ボックスから出ることには、日常の場合こそが「監禁」の場所であるという絶望的な認識から自由になるという意味が託されていたといえる。

この作品では、「ぼく」が、先述のような決意を固めたことを取り上げた引用箇所が続けて、「車道」にあった「轢きつぶされて紙のように薄くなった猫の死骸」を目にする場面を最後に用意している。「ぼく」は、その時、「その薄っぺらな猫のために、名前をつけてやろう」と考えている。「猫」は既に「死骸」となっていて、社会的にその存在を認識させる必要は本来ならばないはずである。にもかかわらず、「名前をつけ」ようとする。それは、「ぼく」が、自分の名前や職業などの記憶を無くし、「過去」からの時間の積み重ねの中で現実社会によって規定されていく自分の存在の意味を見失ってしまうという苦い経験してきたので、また、その苦い経験から、そのように規定される

のではない「自分の世界」を獲得する必要性を自覚するようになったので、「死骸」となり、同じように、現実社会によって規定される存在の意味など持たない「猫」に感情移入しつつ、社会的にその存在を認識させるための「名前」ではなく、誰も知ることのない「名前」——それ故に「自分の世界」の獲得に繋がる「名前」——を「猫のために」付けてやろうとしたからであるだろう。それと同時に、「ぼく」にとっても、「名前をつけ」ることは、「紙のように薄くなった猫の死骸」という、不可解な現実世界を、自分の力で解釈し、「自分の世界」に変えていくことになること考えたからでもあるだろう。こうして、「ぼく」は、「猫の死骸」に「名前をつけ」てやろうとし、それにより、「久しぶりに、贅沢な微笑が頬を融かし、顔をほころばせる」ようになったとして、この作品は締めくくられている。このことは、「猫の死骸」に「名前をつけ」、「自分の世界」を獲得することによって、新たに生き直すことができる」と、「ぼく」が予感するようになったこと、このように予感したことの中に、この作品を締めくくるに相応しい主題が示されていたことを意味している。^(十四)そのことを踏まえ、「ぼく」の中でこうした予感が生まれるきっかけとなった最初の行為が、先述の通り、「監禁」に近い状態にあった公衆電話ボックスから出ることであったことに改めて目を向けるならば、「監禁」状態からの脱却こそが、「ぼく」が新

たに生き直すために何よりも必要なことと意味付けられていたということが見えてくる。「監禁」状態の苦悩や恐怖を生々しく描き出し、そこからの脱却の道筋を示していくことこそが、この作品の眼目であつたのである。^{十五}

結

嘗ての「ぼく」は、興信所の調査員の目で、「逃げ」た人間の状況を距離を置いて眺めていた。そのために、根室が「何処かに監禁」されている可能性もあるという妥当な見解を述べることができた。しかし、調査員のように、知識や情報を収集して活動する場合には特に、下手をすれば、既存の知識や情報に囚われた物の見方しかできなくなることもあるだろう。そうなると、仮に何らかのきっかけでその知識や情報を完全に失ってしまうという事態に直面したならば、眼前の現実世界は、理解不能な得体の知れない相貌を露わにするだろう。その中で、自分自身の存在の意味を見失う「監禁」状態の苦悩に直面しないとも限らない。「ぼく」は、精神に変調を来したことをきつかけとして、正しくこのような「監禁」状態の苦悩に、他ならぬ自身自身が直面してしまった。この苦悩からの脱却のためには、「自分の意志」で「自分の世界」を獲得するしかない。「ぼく」は、その獲得を目指すことによって、新たに生き直す

ための第一歩を踏み出すことができた。

それにしても、この『燃えつきた地図』のような作品が、昭和四十二年という時期に発表されたことから、何を讀み取ることができるだろうか。もともと、詳述は避けなければならぬが、この作品の時代には、図一の紙面にもある通り、人間が日常の場から突然に姿を消す「蒸発」が社会問題となつていた。つまり、当時は、「蒸発」の時代であつた。となると、安部は、この「蒸発」に関心を寄せ、作品に取り込んだのであるから、そのことを通して、時代が抱える問題に迫ろうとしていたと考えてよい。その際、「監禁」という素材を、作品展開の軸になる要素として活用していた。^{十六}それは、注(十)でも言及されている通り、「監禁」が安部の重要なモチーフであつたからに他ならない。あるいは、「蒸発」と「監禁」とが、「一定の場所から姿を消すこと」と「一定の場所に束縛されること」という対照的な意味を持つ言葉であることを踏まえ、「蒸発」の時代を、それと対照的な「監禁」の世界として表現するといふ、いかにも安部らしい面白い着想を具体化しようとしたからであるのかも知れない。ただ、それと同時に、右記のように活用したのは、「蒸発」という言葉を用いるだけでは言い表せない空気——多くの人間が知らぬ間に既知の世界に閉ざされて「自分の世界」を失つていく、「監禁」状態に近い息苦しい空気——をこの時代の都会生活の中に感

じ取っていたからでもあるのではなからうか。そうであれば、安部は、図一の「内河氏との関係否定」の記事に取り上げられている、内河の「ソ連スパイ事件」にもあるいはヒントを得ながら、こうした時代の息苦しい空気を、「監禁」のイメージを活用して表現し、それにより、時代の埋もれた一面を掘り起こそうとしていたということになるだろう。「監禁」に焦点を当てつつ、時代の闇を實在感をもって映し出した『燃えつきた地図』のような作品をこの時代に執筆したことは、安部の鋭い時代感覚を如実に示していると思われる。

注

(一) 図一の新聞は、「去年」の「七月の終りか、八月の始め」の新聞で、作品現在の時点から見て、ある程度の時間の経過した古い新聞である。となると、図一の紙面を途中で破いた状態で掲載したのは、このように古い新聞であることを具体的に示すためであったと推察される。それに加えて、図一の紙面を破いた状態で掲載した理由、特に、図一のような形で掲載した理由は、他にも存在しているのではないかと考えられる。そのように考えるのは、「内河」と「関係」の記事において、記事の一部の言葉をわざわざ残す形で破いて掲載しているからである。このように一部の言葉のみが残される状態になっていればかえって、その言葉に読者の注意の目が向けられ、そこから読者の想像がよりかき立てられることもある。

り得るだろう。となると、図一のような形で掲載した理由として、「内河」と「関係」の記事にある、残された一部の言葉に、具体的にいえば、「スパイ」・「内河昌富」という鍵となるべき言葉に、読者の注意の目を向けさせ、そこから、後述する通り、内河の「ソ連スパイ事件」を思い起こさせようとしていたということも、一つの可能性として考えられる。

(二) この他、図一の『燃えつきた地図』の紙面と図二の東京版の紙面の相違に関する非常に細かな点にも言及すれば、図二の東京版の方では、「坑底に主婦ら80人」という見出しの横に「三池爆発 措置法ですわり込み」という小見出しがあるのであるが、その「置」という文字に注目すると、図一の『燃えつきた地図』の方では、途中で破られていて読みにくくなっているが、この「置」に対応する箇所には、「置」とは明らかに異なる文字が載せられていることが分かる。では、図二の東京版の「置」の文字が、図一の『燃えつきた地図』では異なる文字になっているのは何故であるのか。それは、後述する通り、図一の紙面は、図二の東京版ではなく、図三の北海道版の紙面と同一のものであるからだ。実際、図三の北海道版を見れば、図二の東京版の「三池爆発 措置法ですわり込み」に対応する箇所の小見出しは「三池爆発 補償法ですわり込み」になっている。つまり、図二の「置」に対応する箇所にある、図一の読みにくくなっている文字は、図三のこの小見出しを踏まえれば、「償」であったといえる。『燃えつきた地図』は、図三の北海道版の紙面と同一の紙面であるから、図二の紙面の「置」の文字ではなく、「償」の文字が載せられ

ていたといえる。

(三) 安部は『われらの文学7 安部公房』所収の「略年譜」(昭41・2、講談社)において、「ぼくは東京で生れ、旧満州で育った。しかし原籍は北海道であり、それでも数年の生活経験をもっている。つまり、出生地、出身地、原籍の三つが、それぞれががつているわけだ。おかげで略歴の書き出しが、たいそうむづかしい。ただ、本質的に、故郷を持たない人間だということとは言えると思う。ぼくの感情の底に流れている、一種の故郷憎悪も、あんがいこうした背景によっているのかもしれない。定着を価値づける、あらゆるものが、ぼくを傷つける」と述べている。出生地が東京、出身地が満州であることに加えて、原籍が北海道であるということは、安部にとつて、「定着」から逃れて失踪を試みるという『燃えつきた地図』の主題とも密接に関わるだろう、重い意味を持つていた。そのため、安部は北海道に着目し、この作品の図一の紙面として図三の北海道版を用いたのではないかと推察される。ところで、このように、図一の紙面が北海道版であると仮に考えてよいのであれば、この作品において、根室の失踪先が北海道と設定されていたという可能性も考えられるようになる。というのも、作中で、田代が、図一の新聞を、根室「専用のロッカー」の中から見付けたと述べていたからである。となると、根室は、北海道で印刷・発行される、北海道版の新聞を購入し、東京と推定される自らの家の近くにある、自分「専用のロッカー」にその新聞を入れていたということになる。こうして、根室と北海道との深い関わりが浮かび上が

ってくるので、根室の失踪先が北海道と設定されていた可能性も十分に考えられるのである。「根室」という北海道と関わる名字が用いられていることも、その可能性があったことを示しているだろう。とはいえ、後述する通り、この図一の紙面が北海道版であったと断定することはまだできない。また、田代は虚言癖のある男であるので、根室「専用のロッカー」の中から見付けたという先述の田代の言葉をどこまで信用してよいのかも分からない。そのため、根室の失踪先が北海道であったというのは、現段階では、その可能性もあると指摘するに留めるべき推定である。

(四) 図三の北海道版は、図二の東京版と異なるものの、東京版と相当に類似したものとなっている。それは何故であるのか。その理由を知るために、北海道版の制作過程についても簡単に説明をしておく。北海道支社は昭和三十四年二月十四日に設立された。『朝日新聞社史 昭和戦後編』(平7・7、朝日新聞社)の8によれば、そこで発行される新聞は、「東京でつくった新聞」を「二ページ大のままそっくり電送して、印刷する方式」を用いた、「世界初のファクシミリ新聞」として注目を集めたという。ただし、『50年の歩み 朝日新聞北海道支社』(平21・6、朝日新聞北海道支社)「50年の歩みその2 1970年代」によれば、北海道版は、当初は、東京版を「電送して」そのまま利用していたので、東京版と完全に同じものがあったのであるが、やがて、「北海道向けに変える作業」が行われるようになった。それは、「季節感のズレや首都圏色の濃い紙面」では「北海道で強い違和感」を残してしまうから、ま

た、北海道支社発行の「道内面」の「締め切り」が早かったからとされている。このように、「東京でつくった新聞」を「ページ大のままそっくり電送」しつつ、「北海道向けに変える作業」が行われていたので、図三の北海道版は、図二の東京版と相当に類似しながらも、幾分か異なる紙面を持つようになったのである。

(五) 先述の通り、図一の「内河」と「関係」の記事は、図二の紙面にはなく、論者の調査により、図三の北海道版の紙面に掲載されていたことが分かった。ただし、この「内河」と「関係」の記事は、後掲の図五で示す通り、図二の東京版の紙面の一日前にあたる、昭和四十二年七月十四日の東京版夕刊にも存在していた。そのことは、林夏海氏に教えていただいた。

(六) 前掲の昭和四十二年八月一日東京版『朝日新聞』朝刊の「情報マンの勇み足?」ソ連スパイ事件の「内河さん」の記事によれば、「写真撮影、肉眼視察およびソ連市民との会話によって、ソ連の利益を害するよう利用されうる性格の秘密情報を収集しようとした」というのが、判決要旨が伝える内河さんの「スパイ容疑」である」と記されている。ただし、「内河さんはいわゆるスパイではなく、内閣調査室や世界政経調査会などの情報組織に関係を持つ数多い「情報マン」の一人」というのが「関係筋の一致した見方である」とその記事では述べられている。スパイといえは「暗殺や、殺人のための贈賄や、買収などの非合法的謀略がすぐに思い出される。しかしこれに対して内閣調査室の関係者は「基本的な調査、高度化されたインテリジェンス(情報)がねらいで、謀略などと

んでもない」と弁明する。／警察庁の外事関係幹部はこういう。「インテリジェンス・サービスはむしろ世界で日本だけがおかれている。表面に出ない情報を集めて、判断し、それに対応する政策を立てることは世界各国がやっていることだ。

(以下略)」と記されている。内河は、非合法活動とは必ずしも言い難いこうした「高度化されたインテリジェンス(情報)」の収集を行っていて、拘束されたと推定されている。

(七) 念のため断っておけば、「ぼく」が内河の「ソ連スパイ事件」を確実に知っていたと論じているわけではない。「ぼく」がその事件を知っていたのか否かについては、作中に明記されておらず、はっきりとはしない。仮にその事件を知っていたのであれば、「ぼく」はその事件を踏まえて、根室が「監禁」されている可能性もあるという妥当な見解を述べていたとも考えられる。それに対して、仮にその事件を知らなかったのであれば、「ぼく」はその事件を踏まえて、そのような妥当な見解を述べていたわけではなかったことになる。その場合、「ぼく」は、肌で感じた時代の空気から推定したために、かつ、後述する通り、「逃げ」た人間の思いを距離を置いて眺めていたために、妥当な見解を述べることができたと考えられる。

(八) 「ぼく」は、「前の勤め」をやめて、「興信所」の「調査員」になった。この「調査員」は、「裏通り専門の覗き屋」と言われる、いかかわしさを持った仕事である。その「ぼく」に対して、別居中であった妻は、「分ったわ、あなたは家を出したのよ、逃げ出したのよ」と指摘していた。「ぼく」もまた安定した仕事や日常生活から「逃げ出した」という一面を持って

いる。とはいえ、妻のその指輪に対して、「ぼく」は「いきなり顔に、灰皿のなかみをあびせられたような、ひりひり沁みる屈辱感」を覚えたとされている。このことから分かる通り、この時の「ぼく」は自らが「逃げ出した」ことを未だに受け止めることができたわけではなかったし、「逃げ出し」たという切実な欲求があるか否かについても、自覚的ではなかった。

(九) 先述の通り、精神に変調を来していた「ぼく」は、根室が住んでいたこの「団地」を、「自分の家」であると錯覚するようになっていた。そのために、こゝは、自らの馴染みの場所であるはずなのに、馴染みの場所であるとは感じられないという思いを抱えることになる。

(十) 昭和四十八年の十一月と十二月に行われ、「安部との対話」(平6・8『ユリイカ』)としてまとめられた安部へのインタビューの中で、ナンシー・S・ハーディンの「あなたの迷宮や迷宮、檻や箱などのイメージの使い方は見事だと思ってきました」という言葉を受けて、安部は「中世の封建社会に比べれば、今のぼくたちは解放された社会に暮らしています。しかし、別の意味では自分で自分を入れる檻、または一種の監獄を作ってしまったとも言えます」と述べていた。現在の日常の場を「監禁」の場所と見る意識が安部にあったことを知ることができる。その意識が『燃えつきた地図』にも投影していたと考えられる。

(十一) 「殺され」たり、国家権力によって「監獄」に入れられたりした場合には、連れ戻すことはなかなかできないが、連

れ戻すことが可能であるのであれば、連れ戻すべきである。「ぼく」は考えていた。そのことは、前掲の(Ⅰ)から分かる。また、「自分の意志」で「逃げ」た場合にも、連れ戻すべきであると考えていた。そのことは、前掲の(Ⅱ)や(Ⅲ)から分かる。

(十二) 一例を挙げれば、「ぼく」は「新聞の縮刷版」を調べ、根室が「失踪した八月四日以前に、雨天の日は、七月二十八日、二十九日である」という事実を突き止めていた。調査員として、過去の知識や情報を収集して、事件の真相を解明したり、現実世界を理解したりする姿勢を持っていた。

(十三) 日野啓三「安部公房の矛盾 「砂の女」と「燃えつきた地図」の間」(昭47・9『国文学』)では、猫に名前をつける行為を、「紙のように薄く名づけがたいもの——それが現在であり、真に現在という生ける虚無、足場なき足場に立つて生きる在り方への決意の比喩である」と解釈している。論者は、「ぼく」が猫に感情移入して、「猫のために」名前をつけようとしたこと、そのことが、不可解な現実世界を自分の力で解釈し、「自分の世界」に変えていこうとする「ぼく」の決意とも結び付いていたことを指摘したが、それは、要するに、この日野の解釈と大きな差はない。なお、「日常生活の発見」(昭42・11『新刊ニュース』)という題で行われた安部と磯田光一との対談の中で、磯田は、『燃えつきた地図』の「猫の死骸」に「名前を与えてやる」場面がこれまでの安部の手法とは異なるとして、「いままでの安部さんの小説っていうのは、固有名詞を排除しようという方向に向かってきたという印象を受

けていた」と述べていた。それを受けて、安部は「固有名詞がないんだという認識を、まず作ることで、従来の固有名詞の安住している世界をこわそうという意図があるわけです。同時に、一貫して固有名詞の世界に返っていくんじゃない、新しく名前をつけていくということが可能な世界に、いつかどこかで、はいつていけるんじゃないか」と答えていた。「ぼく」が「猫の死骸」に名前をつけてやる行為は、「従来の固有名詞の安住している世界」に入る行為ではなく、「新しく名前をつけ」ることのできる、新しい世界に入っていく可能性を持つ行為とされていたことをここから知ることができる。

(十四) 安部は、初版『燃えつきた地図』の箱の表側に、この作品について「あえて希望を語りはしなかったが、しかし絶望を語ったわけでもない」という言葉は載せている。それ故、この後の「ぼく」に、「希望」のある人生が待ち受けていたと設定されていたとは必ずしもいえない。そもそも、人間存在の不条理性をしばしば追求していたように見える安部の文学作品の中で、そうたやすく「希望」に到達するところが描かれるとも思えない。もつとも、その一方で、安部は「絶望を語ったわけでもない」とも述べていた。本論で指摘した、「監禁」に近い状態に置かれていた電話ボックスから出るという行為の象徴的な意味も踏まえれば、この後の「ぼく」の人生に「希望」があったとは必ずしもいえずとも、不確かな未来に向けて、新たに生き直すための第一歩を踏み出すことは少なくともできたということが示唆されていたと考えることはできる。

(十五) この作品には、「都会——閉ざされた無限。決して迷うことのない迷路。すべての区画に、そっくり同じ番地がふられた、君だけの地図。／だから君は、道を見失つても、迷うことは出来ないのだ」という題辭が載せられている。この作品において、「監禁」が、もしくは「監禁」状態からの脱却が、重い意味を持つていたことは、この巻頭の「閉ざされた無限」という言葉が既に示唆しているだろう。

(十六) 先述の通り、「ぼく」が根室は「何処かに監禁」されている可能性もあると述べていた(Ⅰ)の場面についていえば、この作品の「監禁」のモチーフと関わる意味をその場面に込めようとする意図が安部にあったとまでいえるのかどうかは定かではない。とはいえ、注(十五)で言及した題辭を読めば、あるいは、「カーブの向うにあるはずの風景」の正体を「ぼく」が見た場面以降の先述してきた描写を踏まえれば、この作品全体を貫くモチーフとして「監禁」を描き出そうとする意図が安部にあったことは確かなことだろう。

附記 『燃えつきた地図』からの引用は、初版(昭42・9、新潮社)により、その他の安部作品からの引用は、『安部公房全集』(平9・7、21・3、新潮社)による。引用箇所傍線と／は論者によるものである。なお、／は改行を意味する。また、図一(a)と図二と図三(a)と図四と図五の丸での囲みも論者による。

(たぐさり・かずま 本学准教授)

図一（a）『燃え尽きた地図』の215ページの「新聞の切れ端」



図一（b） 図一（a）のうち、丸で囲った「内河」と「関係」を含む記事を拡大した図

内河

関係

世界

十四日の参

速でスパイ密

た内河は驚愕

秋氏（社）ら

だ世界政経通

氏（六月三十

て内閣調査委

どについて

まず須山氏

の機密、内閣

いて広岡氏に

図二 昭和四十二年七月十五日の東京版『朝日新聞』朝刊第十五面第十二版（「聞蔵Ⅱ」の紙面。国立国会図書館所蔵も第十二版）

人間 86,254人

各県警に相談所
家出や身元不明の遺体

坑底に主婦ら80人
監置法ですわり込み

来月10日に完工式
「都内へ毎秒」

シゴキ注意され乱暴
誘拐・誘拐防止隊のり人に

焼殺ひるがえす

前線に救傷の動向

男の子員募集

水虫に!

エムピーオー

11日 12時 昭和42年7月15日 北海道版

人間発狂
86,254人

各県警に相談所
家出や身元不明の遺体

警察庁 全国一斉に公開捜索

坑底に主婦ら80人
補償法ですわり込み

久芳焼殺ひるがえす
鳴るる築地の川から出る

他殺の疑い強まる

南の島に祝儀の贈り
水戸藩の歴史

来月10日に完工式
美本列ダム
東京へ毎秒4'送水

期々のしい
受けてうれしい

男子社員募集

高齢な方を求めます

日本ビテイ

住友金属工業株式会社

三井物産電機販売

水虫に!

MPO

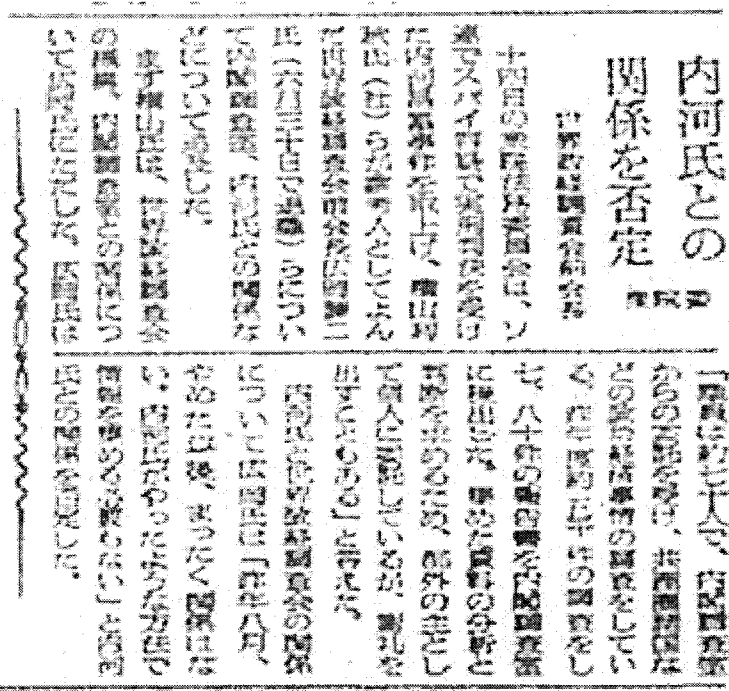
静寂のキメ手

MPO

MPO

MPO

図三(b) 図三(a)のうち、丸で囲った「内河氏との関係否定」の記事を拡大した図





図四 昭和四十二年七月十五日の大阪版『朝日新聞』朝刊第一面第十五版（国立国会図書館所蔵）。丸で囲ったところに「蒸発人間」の記事がある。

図五 昭和四十二年七月十四日の東京版『朝日新聞』夕刊第十二面第三版（聞蔵Ⅱ）の紙面）。丸で囲ったところに、「内河氏との関係否定」の記事がある。

